

初冬の曉天

水野千里

本篇は平松翁がものされた天體一夜話の續篇として筆を採つた目下星の西洋名と支那名とを比較研究中だがよき参考書を得られないので手許にある二、三のものによつた蕪文を草したのである。

一、東空に五大遊星

京都天文臺の中村要氏から昨今水星が一等星位で金星の東にあつて樂に見えるとの御通知を頂いたので去三月末に京都で見たが岡山では未だ替て見たことがないから大正十年十一月十九日午前五時三十分起床東窓を開くと丁度オリオン座の三ツ星の様に乙女座に土火木の三星が一列にならびオリオン座のそれよりは一層美觀を呈しスピカを中にし金星は天秤座にあつて燦然たる光輝を放ちてその北東に一等星これぞ水星である。一時望遠鏡で見ると一部分が虧けて居るので遊星たることが明らかであつた。かく五十度程の間に木火土金水の五大遊星を見ることが出来るのは實に千載の一遇で宵には天王星、小遊星ヴェスタを見、曉には是等の遊星を見ることを得て大

喜び、これに蟹座にある海王星を加へたならば地球以外の七大遊星が眼前に瞬くではないか。

二、銀河附近の星

澄み渡つた空を一瞥したのに北西の地平線に將に沈まんとして居るのは王良五星(カシオペア座) 附路(同座) 策(同座) 閣道六星(同座) で天船九星(ペルセウス座) 大陵八星(同座) 卷舌六星(同座) はこれに續行し、五車五星(駁者座) 漸く視界に入り、畢宿八星(牡牛座) 中の第五星即ちアルデバランはその光特に著しく參宿七星(オリオン座) は西山に入らんとして、(同座) 厠四星(兎座) はその光薄く、これに反して天狼(シリウス) は目醒るやうで、軍市五星(大犬座) はその光を失はんとし、弧矢九星(同座) は其の光度二等星から五等星迄いろ／＼で、壽老人(カス) は最早南西の地平線下に没して見えない。南河三星(小犬座) 中の第三星と天狼と參宿第四星(ベテルギウス) とは略正三角形の位置にあつて其の光輝を競ひ偉觀を呈して居ます

